

城戸奨励賞を受賞して

幼児における特性推論の発達
—特性・動機・行動の因果関係の理解—
(教育心理学研究第48巻3号)

清水 由紀

(お茶の水女子大学人間文化研究科)



このたび、教育心理学研究に掲載されました論文で城戸奨励賞をいただき、大変光栄に存じております。この論文は、1998年度にお茶の水女子大学に提出した修士論文をもとにまとめたものであり、私にとって初めての学術雑誌への投稿論文でした。そのため、今回の受賞には正直なところ、大変驚いております。

実験の実施から論文作成、そして投稿まで、本当にたくさんの方々にお世話になりました。とりわけ指導教官であるお茶の水女子大学の内田伸子教授には、「研究とは何か」ということを一からご指導いただきました。また内田ゼミのメンバーには、研究内容や院生生活についての有益なアドバイスをいただき、くじけそうになる気持ちをいつも支えてもらいました。そして投稿の過程では、査読をしてくださった先生方からのコメントに回答していく中で、雑誌論文の書き方のノウハウを学びました。皆様には、この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

さて、私の研究テーマは、「パーソナリティ特性の理解の発達」です。以下、研究内容について簡単に触れたいと思います。

我々は、他者と相互作用するときに、日常的に「この人は親切な人だなあ」とか「あいつはケチだから、頼んでも引き受けてくれないだろう」というように、パーソナリティ特性 (e.g., “親切な”。以下「特性」) を推論したり、特性から未来の行動を予測したりしています。このような推論や予測は、他者との安定した関係を築くために必要不可欠であると考えられますが、一体このような能力がいつから獲得されるのか? という問いに対する答えを、様々な観点から探索しています。

今回賞をいただきました論文では、3歳から6歳の幼児における特性理解を、実験的に検討しました。特に、

特性が行動の「動機」と関連することを理解しているかどうかには焦点を当てました。具体的には、例えば「たかし君はけい子ちゃんを悲しませようと思って(動機)、けい子ちゃんの作ったシャボン玉を割りました。するとけい子ちゃんは、上手に割れたねと喜びました(結果)」という物語を呈示して、たかし君が「いい子」か「悪い子」のどちらの特性を持つかを推論してもらいました。すると、3歳児と4歳児は結果に基づいて「いい子」であると推論しますが、5歳児と6歳児は動機に基づいて「悪い子」であると推論することが明らかになりました。さらに、推論した特性に基づいて他の場面の行動を予測できるかどうかを調べたところ、6歳児のみが可能であることが示されました。従って、5歳から特性と動機の因果関係について理解し、6歳から特性は特定場面を超えて一貫した行動の原因となるということを理解することが示唆されました。

この実験では、150名近くの子どもに対して面接を行ったのですが、苦労よりも楽しさの方が大きかった記憶があります。このことから、私は無類の子ども好き、という「特性」の持ち主であると推論されます。子どもに対する興味は人一倍あり、実験以外の場面でも子どもと触れ合いながら、「この言葉にはどのような表象が反映されているのだろうか?」「どのようなプロセスを経てこの行動にたどり着いたんだろう?」と考え、それを次の実験につなげています。

そのような子どもとの触れ合いから生じた問題意識の中で、現在検討しているものは、児童期までを含めた特性理解の発達と、特性の理解能力と心的状態(願望や情動など)の理解能力との関連です。今後はさらに、例えば同じポジティブ特性の中にも「積極的な」「親切的な」というように様々な特性があるということを理解しているのかどうかについても検討していきたいと思っております。

「特性の理解の発達」というテーマを追求していく魅力として、「特性」という心的概念の理解が、動機・情動・願望など他の様々な心的概念の理解と深く関わっているという点が挙げられます。なぜなら、特性は、これらの心的概念の個人差を説明するものであるからです。そのため、特性の理解の発達を、これらの心的概念の理解の発達と関連させながら検討していくことは、子どものいわゆる「心の理論」の発達を包括的に捉えることにつながるのではないかと考えています。今後も、微力ながら、特性の理解の検討を通して、幼児・児童における認知発達の解明に努力していこうと思っております。これからもご指導の程、よろしくお願いいたします。